

慶應義塾大学大学院、および日本代表ラグビー等で培われたノウハウを活用し、データ之力で楽しく効率的に運動に挑戦する市民を育てる「データ de スポーツ」プロジェクト始動！

本プロジェクトでは、慶應義塾大学大学院SDMスポーツラボ、慶應キッズパフォーマンスアカデミー、日本代表ラグビー等で培われたデータ駆動型スポーツコーチングのノウハウを活かして、データを活用したスポーツトレーニング、学校体育、地域スポーツなどに取り組む人材を全国各地に増やすことを目指します。

特定非営利活動法人イシュープラスデザイン

まちづくり

スポーツ

データ

プロスポーツ

健康

子ども

教育

運動

● 2022年08月29日 09時30分



特定非営利活動法人イシュープラスデザインは、学校体育の現場、地域スポーツクラブ、部活動、大学・社会人スポーツ、そしてプロスポーツチームまで、GPS等のデジタルデバイスを活用すること運動能力をデータで可視化・分析することで、自分の運動能力と最適なトレーニングプランを理解し、効率的・意欲的・楽しく運動やトレーニングにチャレンジできる市民を育てる「データ de スポーツ」プロジェクトを開始しました。

本プロジェクトは、慶應大学SDM研究科スポーツシステムデザイン・マネジメントラボ、慶應キッズパフォーマンスアカデミーと協業・協力のもとで推進します。

本プロジェクトの第一弾として、GPSデータを活用し個人の成長段階・能力・個性に応じた運動プログラムを提供できるファシリテーターを育成する「データ de スポーツ ファシリテーター養成講座」を開講し、一期生の募集も始めました。

【データ de スポーツとは】

「3か月前よりも速く走れるようになった！」「自分の得意、不得意がよくわかった！」「どんな練習をすればより上達するか理解できた！」

GPS等のデジタル機器とデータ之力を活用することで、一人ひとりの運動能力を分析・可視化し運動能力向上に楽しくチャレンジできる市民特に小中高生・大学生などの若者世代を増やすためのプロジェクト。それが「データ de スポーツ」プロジェクトです。

学校体育や部活動、地域のスポーツクラブ、大学・社会人・プロスポーツ界などでは、今でも画一的、精神論優位、経験主義的な教育が一般的です。その結果、スポーツ・運動を楽しむ機会を持たず苦手意識を持つ子どもが多かったり、個人の能力を超えたトレーニングの結果、怪我に悩まされたりするなど、日本の運動・スポーツ環境はまだまだ課題が山積しています。

私たちは「データ de スポーツ」プロジェクトを通じて個人の成長段階・能力・個性に応じた運動プログラムを提供することで、市民全般が、自分の成長を楽しく追求できる運動環境の実現を目指しています。

プロジェクトWEBサイト：<https://data-de-sports.jp/>

【運営体制】

《運営団体》

慶應義塾大学大学院SDM研究所スポーツシステムデザイン・マネジメントラボ
<https://www.sports.sdm.keio.ac.jp/>

issue+design（特定非営利活動法人イシュープラスデザイン）
<https://issueplusdesign.jp/>

《協力》

慶應キッズパフォーマンスアカデミー
<https://www.kpa.sdm.keio.ac.jp/>

《運営委員》

神武 直彦 慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 教授
笈 裕介 issue+design 代表/慶應義塾大学大学院同研究科 特任教授
太田 千尋 ラグビー日本代表ストレンクス&コンディショニングコーチ/慶應義塾大学大学院同研究科特任助教
和田 康二 慶應キッズパフォーマンスアカデミー運営責任者/慶應義塾大学大学院同研究科特任助教
臼井 智洋 ストレンクス&コンディショニングコーチ

【第1期養成講座】

養成講座とは1.5日かけて、データ活用の基礎知識を学び、プログラムの実践方法を習得する講座です。修了者には、プログラム実践ツールと資格が付与され、ファシリテーターとしてお住まいの地域や組織内で開催することが可能となります。

本講座で養成する「データ de スポーツ ファシリテーター」とは、データを正しく扱う力を身につけ、学校体育・部活動、地域スポーツクラブなどにおいて、主に小中高大生などの若者世代に対して、データを活用した運動能力測定や、運動プログラムを実践できる人材を意味します。

《開催日時・場所》

DAY1 10月14日（金）
19：00～22：00（受付開始18：45）@オンライン

DAY2 10月23日（日）
10：00～18：00（受付開始 9:45）@アークス浦安パーク

養成講座のお申し込み：<https://data-de-sports01.peatix.com>

《本講座を通じて身につけられる4つのスキル》

スキル1 データ・コレクション
GPS等の機器を活用し、必要なデータを正確に取得できる力

スキル2 データ・アナリシス
取得したデータを的確に分析し、対象者の成長や運動能力を明らかにできる力

スキル3 予測・フィードバック
データを元に、個人やチームの成長の見通しをたて、個別にフィードバックする力

スキル4 ファシリテーション
プログラムを企画・設計・運営し、参加者の意欲を高め、有意義な場をつくる力

《活用想定》

活用シーン1 学校体育の現場
データを活用し、子どもたち一人ひとりの成長を後押しし、運動を楽しむことができる学校体育の実現のために

活用シーン2 小中高の部活動や地域スポーツクラブ
怪我を防止し、一人ひとりが楽しめる、ひとりひとりに最適化できるトレーニングの実現と、その結果としてのチーム強化のために

活用シーン3 地域の健康増進活動
参加者個人の健康状態、運動能力と目指したいゴールに合わせた健康増進活動の企画・実施のために

活用シーン4 大学・社会人・プロチームでのトレーニング
GPS等のデータを活用した、怪我の防止と個人のパフォーマンスの最大化を実現できるトレーニングの企画・実施の第一歩として

《本講座を通じて得られるもの》

- GPSデバイスの具体的な使い方（データ収集からパソコンへの移行）
- 分析専用ソフトの活用方法、パソコンでのオペレーションスキル
- 運動能力測定のプロセス実践方法
- 地域で運動能力向上へのデータ活用についてそのまま活用できるプレゼンテーションスライド
- GPSデバイスのレンタル制度の活用
- 同じ志の仲間、講師や専門家とのネットワーク

《講座プログラムの内容》

DAY1 基礎知識編： データマネジメントとスポーツ

データマネジメントの基礎と実践： 神武 直彦

スポーツデータマネジメントの基礎と実践： 太田 千尋

データdeスポーツの概要とライセンス制度： 笥 裕介

DAY2 実践編： GPSデバイスを用いた測定/分析/フィードバック

実践1 基礎能力編： 50m走

実践2 操作能力編： ラグビー風鬼ごっこ

その他、セッションの企画・運営時の注意事項

プログラム1 50M走測定



スピードや加速度などの
「基本能力」を測定する

プログラム2 ラグビー風鬼ごっこ



スピードや運動量などの
「捜査能力」を測定する

《2つの実践プログラム》

養成講座では若年層の運動能力分析の基本となる上記2つのプログラムを実装できるスキルを習得します。その他の活用方法については修了後の個別相談となります。

【ライセンスについて】

用途に応じて、2種類のライセンスをご用意しています。

以下内容をご確認の上、申し込みをお願いいたします。

《通常ライセンス》

プログラムを活用する際の開催費用の徴収：組織の内外での開催を問わず、有料・無料両方可能。

ライセンス対象者：すべての方

想定されるケース：個人/事業者名義で

- 1) 地域などでオープン開催
- 2) 企業・行政等からの依頼案件
- 3) 組織内の自社研修など

受講料：98,000円（税込）※開講記念価格

会費：1,000円/月額、もしくは60,000円（5年間分一括払い）

《アカデミックライセンス》

プログラムを活用する際の開催費用の徴収：組織内部での無料での開催に限る

ライセンス対象者：小中高大の学生および教員、コーチに限る

想定されるケース：個人/事業者名義で

- 1) 小中高大の体育の授業や、部活動での活用
- 2) 組織内の自社研修など

受講料：50,000円（税込）

会費：1,000円/月額、もしくは60,000円（5年間分一括払い）

※大学院を除く学校に通う25歳以下の生徒・学生については卒業までの会費は免除とする

【運営メンバープロフィール】

神武 直彦

慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 教授

大学院修了後、宇宙開発事業団（現宇宙航空研究開発機構）入社。H-IIロケットや人工衛星の開発と検証に従事。欧州宇宙機関研究員を経て、2009年慶應義塾大学准教授、2018年教授。システムデザイン・マネジメントに関する教育研究に従事。日本スポーツ振興センターアドバイザー、総務省「スポーツ×ICTワーキンググループスポーツデータ利活用タスクフォース」主査など、スポーツ、宇宙、データに関する各種委員を歴任。2019年慶應キッズパフォーマ



ンスアカデミー開校、全体責任者を務める。2021年慶應義塾横浜初等部長（兼務）。グッドデザイン賞、論文賞など、国内外の論文、受賞多数。



笥 裕介

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科 特任教授 / issue+design 代表

1998年、「株式会社博報堂」入社。2008年、ソーシャルデザインプロジェクト「issue+design」を設立。以降、社会課題解決のためのデザイン領域の研究、実践に取り組む。代表プロジェクトに東日本大震災支援の「できますゼッケン」、子育て支援の「日本の母子手帳を変えよう」他。主な著書に『ソーシャルデザイン実践ガイド』『持続可能な地域のつくり方』（英治出版）など。グッドデザイン賞、竹尾デザイン賞、日本計画行政学会 学会奨励賞、カンヌライオンズ（フランス）など、国内外の受賞多数。



太田 千尋

ラグビー日本代表ストレンクス&コンディショニングコーチ / 慶應義塾大学大学院同研究科特任助教

日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー。日本トレーニング指導者協会認定上級トレーニング指導者。1979年生まれ、千葉県出身。国際武道大学体育学部体育学科卒、国際武道大学大学院で武道・スポーツ医学系修了。2003年にトップリーグのクボタスピアーズのコンディショニングコーチに就任し、以後U20日本代表や慶應義塾大学、日本代表、サンウルブズなどでストレンクス&コンディショニングコーチを歴任。2019年のラグビーワールドカップ日本大会でも日本代表に帯同し、史上初となるベスト8進出を支えた。パフォーマンスゴールシステム株式会社代表取締役。慶應義塾大学大学院システムデザインマネジメント研究科特任助教。ラグビー日本代表ストレンクス&コンディショニングコーチ。

和田 康二

慶應キッズパフォーマンスアカデミー運営責任者 / 慶應義塾大学大学院同研究科特任助教



1978年茨城県生まれ。慶大ラグビー部では創部100周年の大学日本一や1999年・2000年の2年連続関東大学対抗戦全勝優勝に貢献。主将も務める。2001年総合政策学部卒業後、ゴールドマンサックス証券株式会社に2019年まで従事。2013年から2年間は慶大ラグビー部監督として2年連続大学ベスト4へ導く。2018年より同ゼネラルマネージャー、2022年より慶應高校ラグビー監督を兼務。慶大ラグビー部グラウンドを会場とするマルチスポーツ型運動教室「慶應キッズパフォーマンスアカデミー」の運営責任者。慶應義塾一貫教育校ラグビーの連携・強化や地域社会との連携を推進している。一般社団法人慶應ラグビー倶楽部理事。慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科特任助教。



白井 智洋
ストレングス&コンディショニングコーチ

NSCA-CSCS(認定ストレングス&コンディショニングスペシャリスト)。1991年生まれ、東京都出身。早稲田大学スポーツ科学部卒。2014～2015年ワセダクラブラグビーアカデミー、2014～2016年江戸川大学男子バスケットボール部をサポート。2014年から2020年まで早稲田大学ラグビー蹴球部のストレングス&コンディショニングコーチを務め、2020シーズンはサンウルブズのアシスタントストレングス&コンディショニングコーチとしてチームに帯同した。現在はBring Up Rugby Academyでのコーチ活動に加え、御所実業高校をはじめ全国各地の高校ラグビー部、トランポリン日本代表候補選手など幅広い年代、競技のサポートを行なっている。

【課題背景】

地域のスポーツクラブ、ジュニアユース、体育・部活動・クラブ活動では、今でも画一・横並び、精神論優位、経験主義的な状況が一般化しています。その結果、スポーツ・運動を楽しむ機会や喜ぶ機会が失われ、若者世代を中心にスポーツ・運動離れがますます深刻になってきています。

課題1 運動能力の低下

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、この2年半の間、地域の子供たちが本来得るはずだった運動機会及び社会参加の機会が著しく失われています。体育等の日常機会だけではなく、運動会やスポーツ大会等の行事機会も全て中止になり、また外出自粛・禁止令が出たことにより外遊び等の機会も失われ、子どもたちの運動能力は著しく低下をしています。幼少期に運動機会が満足に得られないことで、運動習慣がないまま中高生・大学生・大人になってしまう人たちもいます。

課題2 運動能力の格差がもたらす低い自己肯定感

コロナ禍以前より、他者との競争を前提とした運動・スポーツプログラムにおいては、優劣を成績や順位等で明確につけることを是としており、運動能力の格差によって子供たちの自己肯定感が著しく低下をしています。画一的な評価軸が設定されている学校教育により、幼少期から形成された劣等感・運動嫌いを抱いている中高生・大学生・大人も一定数存在しています。

課題3 画一的・強制的な教育や部活動によるジュニア世代の怪我

学校・地域の運動クラブ等では、個々人の走力や跳躍力等の運動能力を的確に把握することが難しく、体格や運動能力に関わらず、画一的な指導がなされており、怪我リスクが非常に高い状況が生まれています。必要以上に高負荷な教育・部活動を強いられることでジュニア世代の怪我は増加傾向にあります。ジュニア世代に負った怪我を抱え、生活や運動に一定の制約を受けながら暮らしている人も珍しくありません。

